

学校運動部での「高校野球神話」の再生産過程

～潜在的カリキュラム論に依拠して～

○清水一巳（福岡大学大学院） 大谷善博（福岡大学） 山田力也（福岡大学）

1. 研究の目的

わが国のスポーツ文化の発展は歴史的に学校の運動部を中心に行われてきた。それを基にスポーツの普及がなされ、現在では『みるスポーツ』をも含む、個人の生きがい形成との関連まで幅広い分野に及んでいる。しかし、このように多様性がでてきた今日でもその『スポーツ観』の形成には学校運動部が中心となり機能しているといえることができる。このことは、全国高校野球選手権大会やインターハイなどがメディアに大々的に取り上げられるとともに、それらを目標とする（させられる）子どもや指導者の存在が未だ絶えずあること、そして、そのようなシステム（学校・スポーツ組織）がスポーツ文化の形成装置として維持され続けていることからわかる。

学校運動部に関連する研究は、主として学校運動部の構造やメディアとの関連、監督の専門性の問題や競技スポーツからのドロップアウトなどに注目され、そのあり方についての提言が行なわれてきている。また、近年（1990～1998の体育関連雑誌上）の学校運動部関連の議論は「教育的意義」「内在する問題」「指導者像」「高度化と大衆化」「部活動と地域社会の関連」といった領域に大別することができる。

このような部活動の実態を理解・把握する上で、そこで日常的に繰り返し行われている事柄を明らかにし、社会との関連を明らかにすることは有用であると考えられる。そこで本研究では監督と部員との関係に焦点をあて、そこでの意味解釈過程において(1)そこでは何が、どのような場面で、どのように学ばれているのか。(2)誰の意図による、どのような身体文化が再生産（変容）されてきているのかという視点で、学校運動部でのスポーツ文化の生成・伝達過程を検討していくことを目的とする。

今回の報告では、高校野球（部）を対象とする。それは以下の理由によるものである。①長い歴史を有し、制度的にも確立されている。②その競技性においても甲子園大会を頂点とし、制度化が進んでいる。③上記の点から、教育と競技のヒエラルヒー構造に埋め込まれた現在の学校運動部の典型とみなされる。

清水論はそこで、メディアとの関連から「甲子園神話」が生み出され、再生産され続けている¹⁾と指摘する。では、実際に部員たちが身につけている（つけさせられている）高校球児らしさとはどのようなものか。また、どの様に身につけているのかということ、そこで教えられている価値、規範、信念の体系ともいわれている潜在的カリキュラムに焦点を当て論考を進めることにする。

2. 高校野球と神話

神話の再生産過程の大きな要因としてメディアの影響が挙げられている。しかし、いくら「らしさ」の見方を提示しようとしても、その構成主体（運動部、球児など）が変化してしまえば、その意味体系も変化し、その神話は変化あるいは忘れ去られるであろう。それにもかかわらず再生産され続けているのはなぜなのであろうか。そのことを杉本は甲子園を劇場と表現し、「高校生は高校野球を演じている」²⁾ということにより説明している。このことには、彼らが直接的に目的を達成するために行なう意識的な行為だけでなく、無意識的な性向体系にしたがった行為も含まれていると考えることができる。（例えば、グラウンドへの挨拶、必要以上に大きな声での返事）

それでは、なぜ部員はそのような「高校球児らしさ」を“演じる”ようになるのだろうか。高校球児は日常の練習（生活）において甲子園神話を支えている「高校球児の演じ方」を身につけているの

ではないだろうか。

特に高校野球においてはその指導者の大半が高校野球の経験者とみることができるので、監督は高校球児らしく振舞うことを経験しており、高校野球というものは「かくあるべき」という前提のもとに指導にあたっていることが考えられる。この「かくあるべき」というものを規定する要因として、監督が経験的に身につけてきた「価値、規範、信念の体系」とメディアを中心とし社会的に生成されている「甲子園神話」が考えられる。

神話とは、社会の制度事物の本来のあり方、及びその正当化の役割を果たしており、また、儀礼に根拠を提供し、儀礼によって神話が再現されたりその内容の安定性が保証されることもある。その象徴や隠喩に満ちた語りのなかで社会の秩序の認知や解釈が表明されるのである。

甲子園野球における神話とは、清水論によるとメディアの影響を大きく受け、「青春」や「若者らしさ」の「物語」が生成され、それが、歴史的に繰り返されることにより、神話化されたものであるという。また、その安定性の保証により、試合での儀式的な行為や日本高等学校野球連盟によってその「物語」に反する現実が処分、規制の対象とされることなどにその根拠をあたえている。また、指導者は、神話により正当性の根拠を与えられ、指導理念を身につけることになる。このような監督との関係において、高校生は日常の練習を繰り返していくうちに高校球児としての振舞い方を学び、再び甲子園神話を支えていくことになるのではないかと。

3. 潜在的カリキュラム

学校教育においては顕在的に示される教育の目標や教科ごとの目標の他に、日常生活の中で繰り返し体験される出来事を通して学ばれることがあるという。このことを潜在的カリキュラムという。P.W. ジャクソンによって提起された概念であり、学校で日常的に体験する重複的で冗長的な及び儀礼主義的な行為は、意識されないところで生徒たちに大きな影響を及ぼしており、教師や生徒の評価を受け入れること（「賞賛」）、他人のまなざしを意識し仲間と行動をともにすること（「仲間」）、教室内に権威が存在していることを大切にしたり規則に従うことができる（「権力」）という合意システムがあることを認識した。このような暗黙のルールを習得することは学校での生活への適応に関して重要な意味を持っている。

また、M.W. アップルは「生徒たちが学校においてながい間、制度的欲求や日課に合わせて過ごすだけで受けている、一定の価値・規範・性向のひそかな教え込み」とレイデオロギーの役割を持つことに注目する。このように何を「隠れたもの」とするかによって潜在的カリキュラムへの関心は、学校の風土や伝統といった学校組織レベル、さらによりマクロな教育システムにおける社会統制との関わりなど幅広い次元に及んでいる。

松田はその理論的検討を行い、その概念枠の「有意さ」は、学校を支える条件を根底から見つめ直し、その実態の厳密な把握と相対化という点に問題意識を有していると捉えている。また、体育における評定活動においてエスノメソドロジーを採用し、「カテゴリーとは外から与えられるものである」という潜在的カリキュラムを見出している。

このような潜在的カリキュラムは、顕在的、フォーマルなカリキュラムにもとづく教育活動をサポートする機能を持つこともあるが、学校教育が意図しない否定的価値を潜在的に学習する反教育システムとしても機能する。

本論では以上のことからマクロ的な視点を念頭においたうえで、監督と部員間におけるミクロレベルの潜在的カリキュラムを探ることに重点をおくことにする。

4. 分析枠組

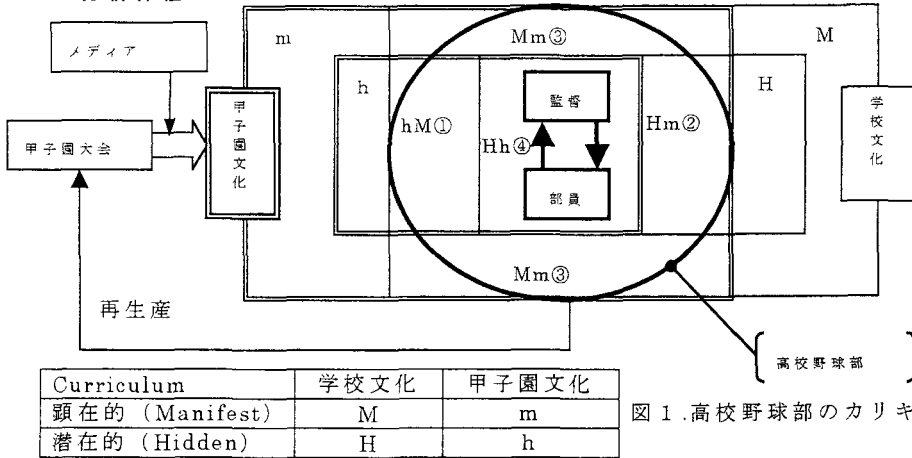


図1. 高校野球部のカリキュラム形態

教育システムの中の学校文化とメディアの影響により形成された甲子園文化が重なり合うところが高校野球部である。そこでは学習指導要領に示される部活動の目標や部の規範など顕在的に示されるものから、しぐさや態度など、指導者もまた部員も意識せず学んでいることがらがある。その場面において特徴的なものを以下に分類した。(以下の①～④は図1に対応)

- ① 学校文化に顕在的で甲子園文化に潜在的なカリキュラム
校訓や校歌に示される。甲子園神話と重なるところもある。
- ② 甲子園文化に顕在的で学校文化に潜在的なカリキュラム
運動部における目標などはこの場合が多い(競争の原理)。
- ③ 学校文化、甲子園文化両方において顕在的なカリキュラム
学習指導要領－運動部の目標－部の規範、高校野球連盟の「高校生の健全育成」と関連した指導。
- ④ 学校文化、甲子園文化両方において潜在的なカリキュラム
日常における慣習的(伝統的)行為、しぐさ、言説(ミーティング時に特徴的に見られる)など

5. 作業仮説

上述の分析枠組をもとに作業仮説をたてると以下ようになる。

- 1) 野球部は甲子園文化と学校文化のせめぎ合う場である。
- 2) そこでは監督と部員とのやりとり(日常の練習)において、神話の再生産に必要とされる事柄(高校球児としての価値・規範・信念)が伝達されている。
- 3) そこで学ばれるものは、顕在的なものより潜在的なものの方が、再生産過程においてより意味を持つことになる。

6. 調査及び分析

K 工業高校野球部において、新しく2年生、1年生によるチームが創られていく時期の日常の練習に帯同することによる非参与観察とともに、ミーティングと監督－部員間の会話を中心にビデオとテープレコーダーにより記録した。また、監督及び指導関係者と一部の部員へのインタビューをおこない、これらを補足するために部員に記述式のアンケート調査を行った。

これらの資料をもとに日常の練習場面においてどのような意味付与がなされているのか、解釈的に検討していくことにする。

7. 高校球児の生成過程

ここでは、調査の分析結果を要約的に記述するとともにとめることにする。

日常の練習において監督一部員関係が象徴的にみてとれるのが練習の開始時、終了時のミーティングである。監督を中心に半円形に整列し脱帽した後、主将の号令に合わせて監督に対して大声で挨拶を行う（これらは教室における授業の開始、終了時の挨拶に似ているが、その統制は教室に比べるとはるかにとれている）。このことから部員は監督というものの“権威”を学び、また、試合時のメンバーの発表などからは監督により“評価される”ということを学んでいる。これらは教室での生活で学ぶことと共通しており、部員は「学校での活動」ということを再認識されることになる。教室と異なるのは、そこで教えられる知識や技能というものは監督によって選別されているということである。

しかし、そこでの監督は「うちは勝つ野球と育てる野球…勝つことだけが目標じゃないけど、勝つことを…」という言葉からも、その選別活動では教育性と競技性のダブル・バインド状態にあると考えられる。それが、部員に伝えられるときには「みんなで競争して、チームのレベルを上げよう」というような「みんなで」という協調とそれに反する「競争」という二重性を帯びて表出していた。また、「やるかやらないかは、自分たちだね」、「練習には自分で課題を持ってくる」というように部員の自主性を要求しつつも、野球部では監督による評価がなされる為、監督のコントロールや要求に対処しなければならないというダブル・バインド状態が付与されていた。では、このような指導により、部員は何を学ぶのだろうか。その「教育性」や「競技性」といった顕在的なことに対しては、ミーティング時の話に聞き入ったり、聞いている“ふり”等により準拠したり対抗したりと各部員の解釈の仕方によって様々である。しかし、このような日常を繰り返していくうちに野球部では潜在的に野球部員としての価値・規範・信念というものが身につけられていき、高校球児としての解釈のフレームへと移行していくのではないだろうか。

ゴフマンは共在の「状況固有」のものとして「非関連ルール」の作動と「変換ルール」の作動の二つの局面をあげている。前者の面において、高校野球部というの「甲子園大会」あるいはそこでの勝利を目指すものとして形成されている。これと無関係な「私的」な感情や身体欲求は「野球部の一員として」等という言葉により抑制されたりする。多量の出来事（多様な部員、高校野球のあり方）に一定の『フレーム（高校球児）』がおかれ、これに収まるものだけに感応する『感覚』の型が作りあげられる。これが「高校球児らしさ」である。その生成過程において潜在的カリキュラムがより意味を持つてくると考えられる。

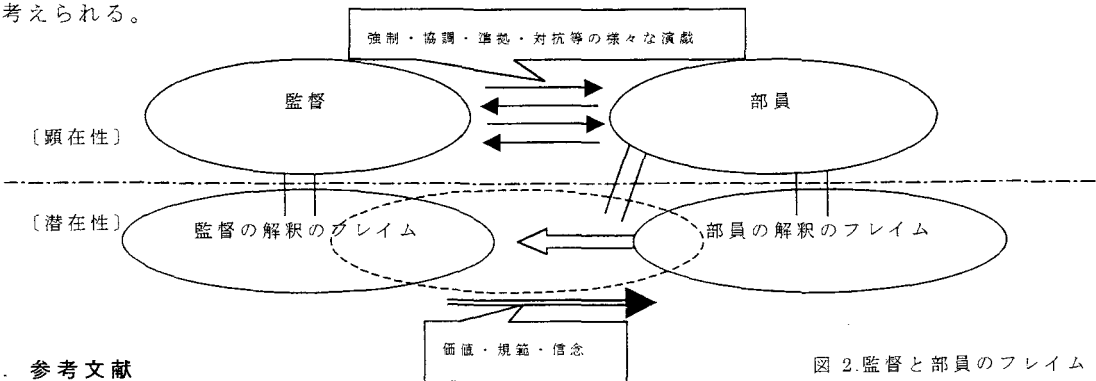


図 2. 監督と部員のフレーム

8. 参考文献

- 1) 清水 論：甲子園野球のアルケオロジー、新評論、1998年、271頁
- 2) 杉本 厚夫：劇場としての甲子園、江刺正吾、小椋博編著、高校野球の社会学 甲子園を読む、世界思想社、1994年、16-38頁